
願わくば…

雷鳴りの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願わくば…

【Nコード】

N2500I

【作者名】

雷鳴りの

【あらすじ】

とある世界の少年と少女が邂逅するとき物語は始まる―…。

＊連載再開しました！

彼らの勇姿を最後までご覧ください！

少年と少女（1）

『とある世界のある少年のお話』

朝。

一人の少年が規則正しい寝息をたてて気持ちよさそうに寝ている。季節は春真っ只中。空は蒼く澄んでいて、思わず空を見上げれば笑顔が零れてしまう。

少年が住んでいるのはアパートの一室だが、部屋自体が南に面していて、窓からは日の光が差し込みとても明るい空間が広がっていた。彼の住むこの世界はまるで海の中を見ているかのように碧や翠あおみどりといった色に光輝いていて、人々の目には美しい桃源郷が映し出されていた。

しかし、この世界が美しく澄んでいればいるほど他世界からは嫉妬と渴望の眼差しが向けられる。

そしてその感情は人々の中の『負』マイナスのオーラのボルテージを上げ、心を闇に染めていく。

闇に心を染められた者は人の皮を被った鬼へと成り果てる。そうした鬼たちは人の心の『輝き』を求め殺戮を引き起こす。まるで失ってしまった自身の心を取り戻そうとするかのように……。

日の光が空高く上がった頃ようやく少年は大きな伸びをして起き上がる。少年の目はまだ眠そうにしていたが、ある一点を見つめ小さく笑った。その視線の先にはひとつの写真があった。

突如其来なまどろみから覚醒し、寝起きだというのにもかかわらず部屋を飛び出して行った。

その手首には鈍色にびいろの鎌の形をしたアクセサリーがついたブレスレットをして、その目には蒼い、サファイアの光と強い意思を携えてい

た。

『とある世界のある少女の物語』

昼。

ある少女がなんにもない草原にたっていた。否、そこはすでに草原の面影はなく巨大なクレーターが出来ていた。その中心には紅黒く鈍い光を放つ普通の剣の倍はあるだろう巨大な剣を片手で持った少女がいた。長い黒髪をひとつに束ね右側に結っていた。少女の華奢な体型からは想像できないほど大人びた雰囲気醸し出して、その目は朱い光を湛えていた。

持っていた剣を背負っていた鞆に納めると、少女はありえない跳躍をしてクレーターの中から飛び出した。その時、少女が羽織っていた薄い水色のコートが翻った。

しゃららん、と可愛い音がして胸元のふたつのロケットペンダントが擦りあった。

寄り添うようなふたつのペンダントはサファイアとルビーの光を放っている。

少女は地面に降り立ちサファイアのペンダントを手に取り、開いた。そこには少女より若干歳が上に見える少年が写っていた。

少女はしばらくそれを憂いのある表情で見ていたが、パチンとペンダントを閉じ、前を向いて走りだした。

―その目には先ほどの憂いのある光は見られず代わりに朱い光を携えていた。

『とある世界の少年と少女の邂逅』

夜。

この世界には電気などの作り出された光はない。

そのかわりに人々はある宝石を使い自然そのままの光を手に入れた。自然や鉱物に恵まれたこの世界ならではの芸当である。

昼間の太陽の光を『陽』の光と呼び、夜の月の光に当てられ光る宝石を『隠』の光と呼ぶ。隠の光とは月に照らされたクリスタルの光である。この世界のクリスタルは特殊で昼間の内に陽の光を当ててから月の光に当てるとクリスタル自体が淡い光を放つ。それはとても幻想的であるため初めて見た者はうっとりとしてしまう。

光の強さはクリスタルの大きさと決まるが家の中を照らすだけなら消しゴムほどの大きさで十分なのでクリスタルが減って困ることはない。他の宝石でも同じことができ、クリスタルは白い光を出すがるビーは朱、サファイアは蒼、などさまざまな光を出すことができる。

この世界に住む人々は空から陽の光が消えると後は家からあまり外に出ることはない。外では夜の住人が行動を開始してしまうからだ。それらは『鬼』と呼ばれ人々を襲い殺戮を繰り返す。

しかしそれでは夜の時間が家の中だけに制限されてしまうため、一部の者達は快楽を求め夜の世界へと入って行っていき、心を食われ鬼になってしまう者もいる。夜の世界は鬼によって支配されているのだ。それにより人々は怯えて家にいるしかなくなる……。

たったったったっ……

夜の闇の中、足音が響いた。その足音を聞きつけた鬼たちは本能のままに足音のする方へと寄っていく。

―久々の獲物だ……、早く食わせろ……

さまざまな心の声がところかまわず聞こえてくる。

不意に足音が止んだ。鬼たちはしめたと顔歪ませて一目散に獲物の元へと向かっていった。

鬼たちがたどり着いた場所は見通しのよい原っぱであった。その原っぱの真ん中に人影が見えた。鬼たちが全員その場に目を向けた瞬間、人影のほうから空へ何かが投げられた。それは月の光に当てられ眩しいくらいの隠の光を放った。

いきなりの閃光に鬼たちが顔を背けた瞬間、人影は鬼たち目掛けて走りだした。

ちょうど閃光が放たれたとき、それを見た人々は口々に、

「やつ闇を切り開く光・・・しっ死神っっ!」

「死神がでたぞー!!」

「気をつけろ! 死神は鬼だけじゃなく俺らまで巻き込むぞ!!」

そう言ってその場から少しでも逃げようとするが、結局鬼が怖くて人々は家の中にいる以外選択肢がなくなってしまう。

人々が家で怯えて時が過ぎるのを待っていると外にひとつの人影が現れた。その人影は周りの人々とは異なり、平然と、ある一点を見つめ歩いていく。

―それは折しも閃光が放たれた場所だった。

原っぱではすでに人影と鬼たちの激戦が始まっていた。しかし、優

位なのは人影のほうであることが一目瞭然であった。身の丈ほどある巨大な鈍色の鎌を片手で振り回し、鬼たちを切り裂いていく――ように見えたが、鎌にも周りにも血が飛び散ることはなかった。

次々に鬼たちはうめき声をあげて倒れていく。姿形は人間であつても闇に心を染められてしまえば邪気は一気に膨れ上がり、爆発する。しかし、倒れた鬼たちからは徐々に邪気が消えていき、規則正しい寝息が聞こえてきた。そこにいるのはもう鬼ではなく・・・あるべき姿、つまり人間に戻っていた。

原っぱに立っているのが人影ひとりとなった。

天に向けて鈍色の鎌をかざすと瞬時に手から鎌がかき消え、代わりに手首にアクセサリーのついたブレスレットが、しゃらんと音をたてて顕現する。

そしてその場を去ろうとして踵を返した時、後ろから突然突風が吹いた。

振り返って見ればそこにはもうひとつの人影があつた。

二つの影はしばらく無言を貫いていたが、沈黙に耐えられなかったのかひとつの影がため息をついた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なあ、そこで何してるんだ？」

影のひとつがもうひとつの影に話しかけた。大人びていて低い、それでいて少年のようなその声は疲れているのか少し弱々しいが、凜とした響きがあつた。

「・・・・・・・・・・」

しかし、影はその問いかけに答えずただ沈黙を保ち続ける。二つの影の間はかなり距離が空いていたが、先ほどのクリスタルがまだ光を放っているのです。そこに誰かがいるのだけは分かった。

「…………無視するなよ。何してんだって聞いてるんだ」

その声は先ほどよりも切なさがましていた。

「……………」

だが、再度問いかけても返ってくるのは沈黙だけ。

「……………」

再び静寂が支配する。

どれほどの時間そうしていただろう。

夜の闇は深くなり、月の光に照らされ先ほど投げられたクリスタルは一層輝きが増した。その光に耐えられなくなった影のひとつが落ちていくクリスタルのところまで行き、面倒臭そうにクリスタルを拾い、ポケットにしまいこんだ。月の光が届かなくなったクリスタルからは徐々に輝きが失せ、元の宝石の光に戻った。しかし、元々の月の光が強かったため、視界はおぼろげながらも見えてくる。相手のシルエットが確認できるほどに。

辺りに再び静寂が戻ったとき、ひとつの影がおもむろに息を吐き、問いかけた。

「いつまでこんなことを続けるつもりなの？——昂兄^{ひょうけい}さん……」

その言葉に兄さんと呼ばれた相手の影は取り乱すこともせずただ淡

々と言葉を返す。

「・・・俺の命尽きるまで」

「そんなことしたって無意味だよ！鬼になった者のその時の記憶を奪うなんて！ただの一時しのぎにしかないじゃない！！鬼になったやつらに情けなんかいらない！殺すしか、殺すしかあいつらを殲滅せんめつする方法はないんだよ！？・・・それなのにとどうして！？ねえ、昂！」

兄の言葉に耐えられなかったのか、影が一步前に出て息もつかずに大声で怒鳴った。

月明かりに照らされ顔がおぼろげに闇の中に映し出された。そのシルエットは少女の姿をしていたが、先ほどの声に比べてずいぶんと幼い姿をしていた。少女のその目は憤怒を表していたが、興奮したため呼吸が乱れていた。

「・・・沙梨香さりか・・・」

「・・・・・・・・」

兄のつぶやきともうめき声とも取れる言葉に沙梨香と呼ばれた少女はただ唇を噛んで俯いた。手は固く握られ血が滴り落ちてくる。

―この二人が今ようにすれ違ってしまったのは互いに相手を守りたいがためだった。

『二人の過去』

私たちが軽く口にしている『世界』。

この単語ひとつを見ると微妙な違いをたくさん持っている。日常の世界、社会の世界、ブラウン管の中と外など複数の言い回しで使われる。しかし、それは人によって感じ方が違う。

私たちの星には『世界』はひとつしかなく、その時その場を共有できる唯一のことを『世界』といい、共有できない『世界』を【異世界】と呼ぶ。つまり、今生きてこの『地球』という星に存在するところが『世界』を共有できるということになる。その中でも人は自身自身の小さな世界を作り出す。それが上に上げた世界だ。

鬼と呼ばれる人間のまがい物に成り下がってしまった彼らは本来昂たちとは別の『世界』を生きていた。

しかし、どんな偶然か分からないがひょんなことからこの世界に迷いこんでしまった。

そして彼らは『世界』に魅了された。

誘惑された心は嫉妬に燃え次第に人の思いを失い、人々を襲い、心を求めてさ迷い歩くことになる。

―これが『鬼』の誕生である。

みなみじゅうじ

南十字昂と南十字沙梨香は仲の良い兄妹だった。二人には両親がおり、苦しく、貧しい生活を送っていたがお互いを大切にしながら、二人三脚をして生きてきた。この頃の世界には鬼がまだ現れていない夜になれば青春を謳歌している若者たちで賑わっていた。

しかし、いつの頃からか覇気のない人たちが街をさまようようになった。そしてそれらは人々を襲い始めた。恐怖を覚えた人々はそれらを―『鬼』と呼び始めた。人々は夜になるとけして外に出ず家の中に閉じ籠るようになった。

それは二人も同じで部屋の中で身を寄せるようにして過ごしていた。しかし、貧しい生活の二人には夜に部屋に閉じ籠ってばかりでは今

の状態を維持して行くことが出来なかった。

街では鬼たちに対抗するべく、あるものを持って外に出るようになった。クリスタルである。たとえ鬼たちと出くわしてしまったとしても、クリスタルを放って相手を怯ませその隙に逃げるためだ。

昴も同様にして夜の闇の世界へと入って行った。

―この時をもって後に仲のよい兄妹を見ることはなかった。

たったったったっ・・・

夜の闇の中足音が響く。ひとつの影が何かから逃げるようにして走っていく。その後ろを膨大な数の鬼たちが追っていた。

影Ⅱ昴は仕事帰りに鬼と出くわしてしまった。その時はクリスタルを放って逃げようとしたがその光が逆に他の鬼たちを引き寄せてしまった。

ぜえっぜえっ・・・はあっはあっ・・・

荒い呼吸が街に響く。月の光以外に明かりがない夜の闇の中、昴はただ必死に走っていく。後ろからは一定の距離を保って鬼たちがついてくる。だが、徐々にその距離が狭まってくる。

―このままでは捕まってしまう・・・

昴は意を決して疲労で動きがままならない体に鞭を打って全速力で走りだした。

―家とは反対の道を。愛しい妹の姿を思い描きながら

昴はただひたすらに走っていくとある場所にたどり着いた。街はず

れの少し広い広場で、よく妹と遊^さんでいた思い出深い場所だった。
昂は小さく笑って広場の真ん中まできて止まった。

―無意識に駆けてきたのにここに來たのはもうすぐこの世界から自分
は消えるからかな・・・。

荒い呼吸を繰り返しながら昂はぼんやりと思った。

鬼たちが自分を食うために迫ってくるのを頭の隅で感じながら。自
然と恐怖は感じなかった。

昂は自分が鬼たちに包囲されたのを見て片膝を地面に落として、目
を閉じた。

―ごめんな沙梨香。守ってやれなくて

ポタツ閉じていた瞼から涙が一粒頬を伝わって地面に落ちた。
それを合図に鬼たちは昂へと襲いかかった―

少年と少女（2）

―どれくらいの時間がたったのだろうか・・・

いつまでたっても鬼たちが襲ってくる気配がない。

昴が恐る恐る目を開けると、

「おっ？　なんだ寝てたんじゃねえのかよ。まあ、お前は運が良かったよな。なんせ俺様が助けてやったんだからな！」

そこには昴と同じくらいか若干上に見える少年がいた。

少年はガハハっと言って胸を張っているのだが、昴はただ呆然としている。いや、脳が麻痺したかのように、話せる状態ではないのだ。―少年が持っている長く、淡い黄緑色のぼんやりとした光を放つ長剣に目を奪われて。

―この人は一体・・・？

ようやくその問いが頭に浮かんだ。すると、

「オイオイオイ、助けてやったって―のに礼の言葉も出てこねえのかよ！　とんだガキだな、ったく」

大げさにため息をつきながら少年は、そりゃないぜのポーズを取っている。しかし、その顔はニヤニヤと笑っていた。

昴もはっと我に返り礼を言おうとした―が、

「・・・っあ・・・っりっが・・・」

声が出ない。何度も何度も口は開くの肝心の言葉が出てこない。その様子を見ていた少年が急に真面目な顔で、ああと思い出したように言った。

「お前はまだちゃんと助かったわけじゃねえんだわ。半分くらい鬼どもに心を食われちゃった（・・・・・・）からな。それでもそこまで意識を保ってられんのはけっこう奇跡に近いんじゃないかな。」

その言葉に昴は頭が真っ白になった。

「鬼に・・・・心を食われた・・・・。ならば自分は鬼になっ
てしまったのか・・・」

放心している昴をよそに少年は話し続ける。

「まあ、言うなりやお前は『鬼のなりそこない』ってとこだな！」

「っ！・・・・・・」

少年の放った一言は昴の胸に突き刺さった。無意識に涙が流れて声が出ないのに声を上げようとして必死に口を開く。その姿はあまりにも滑稽で、哀れであった。

昴の様子に自慢気に自分の活躍を語っていた少年が昴のほうを見た。しばらくは無言であったが、昴の様子が見ていらなかったのか、または罪悪感からか頭をかきながらポケットからあるものを取り出して昴の前に突き出した。

突然のことに昴も驚いて涙を拭くのも忘れて、差し出されたものを条件反射で受け取ってしまう。それはブレスレットに鎌のキーホルダーがついているものだった。昴が頭に？を浮かべて少年を見上げ

ると、どっこいしょと言って目の前に座って昴のほうを見て口を開いた。

「あのなあ・・・お前ら一般人は『世界』について何も知らねえ。いや、知るすべを知らねえんだ。それは別に知らねえことを責めるわけじゃない。それが普通だからだ。だが、そこで寝ているやつらはお前ら一般人とはちよつと違う。『世界』の真実に触れちまつたんだ。」

いきなり話し始めた少年は目線だけ動かして周りを見た。昴もそれにならって倒れている人たちを見た。闇の中に点在する倒れている人々の寝息だけが規則的に聞こえる。けれど、

―何か・・・違和感が・・・ある・・・。なんだろう・・・？

一見するとただ寝ているようにしか見えないのに昴にはその人たちがなんだか泣いているように見えた。まるで心の声が聞こえてくるかのように…。

一通り見回すと少年のほうに向き直った。少年は、あく説明すんの苦手なんだよ、と頭をがしがしかいてブツブツと言っていた。しかし昴の困ったような顔を見て息を吐き、やれやれとまた話し始めた。

「なんつーか・・・あいつら違和感あんだろ？それは分かっか？」

昴が素直に首を縦に振ってうなづく。

「あくやっぱ分かるか・・・。とりあえずお前、鬼がどうやって生まれたか知ってっか？」

ふるふると横に振る。すると少年が面倒臭そうに頭をかいて苦々し

い顔をした。

「知らねえのはしかたねえんだけど・・・まあ知ってる俺が異常なんだし。・・・よし、今から『世界』のことについて俺が知ってっことを教える。知った後どうするかお前が自分で決めろ。―何をつけて顔だな。それを今から話してやる。・・・ここまで理解できてっか？」

少年が訝しげな顔で昴を見ると、戸惑いながらも頷いた。

『世界の真実』

少年は話し始めた。鬼のこと、『世界』のこと。『世界』というのはたくさんあって、ひとつひとつ自分たちがいる『世界』とは異なる。昴たちの世界は蒼く澄んでいるが他の『世界』は黒かったりするし、電気や自動車など機械が発展した『世界』もある。魔法やモンスターが存在している世界もある。しかし、多種多様な『世界』にも共通点がある。そこには『生物』が存在していること。これは『世界』が成り立つために必須な条件である。

そして、話は鬼たちへと移る。鬼の中には昴の『世界』の人間もある。だが、最初の鬼は【異世界】から来た人間である。そうなるといくつか疑問が生じる。

―ならばなぜ他の『世界』の人たちはこの『世界』に迷いこんだのか？

『世界』と『世界』はごくたまにつながってしまうことがある。時

間と空間が一点でつながり、空間に『穴』があく。―それを『時空の歪み』と呼ぶ。

そしてその『穴』は人々を吸い込み反対の『世界』へ吐き出す。だが、普通は『世界』に無事降りたつが稀に『世界』と『世界』の狭間に落ち、死に至る場合もある。

「・・・ここまではいいか？」

少年は文字通り頭を抱えてしまった昴に話しかける。

「あ・・・えっ・・・と・・・はい、大丈夫・・・です・・・
ってあっあれ？」

「おっ？声でるようになったか！良かったじゃねえか、鬼になんなくてよ」

少年がニヤニヤしてそう言った。その言葉が昴の頭に引っかかった。
―が質問する前にまた少年の話が再開した。

「つーことで鬼ってのは【異世界】から来たやつが自分の『世界』に帰ってえとか、『世界』に魅了されたりして、自分の中に眠る『負』のオーラに吞まれちゃった者のことを総称して『鬼』と呼ぶんだ。」

ふあああああ・・・少年が眠そうにあくびをした。その時を見計らってたように昴が口を開いた。

「あの、質問・・・してもいいですか？」

「ンあ？なんだ？」

昴の言葉に少年は氣のない返事で返す。昴はすーはーすーはーと深呼吸をして真剣の顔で少年を食い入るように見据えた。昴のただならぬオーラに少年も真面目な顔で昴の言葉を待った。少しの沈黙のあと、昴がゆっくり口を開いた。

「お名前はなんていうんですか!？」

ズコー!

少年は座っているにもかかわらず大げさなりアクションで転げてしまった。そのくらい昴の質問はおかしかった。

—今の状況と話を聞いというて最初の質問がそれかよ!

少年は一呼吸おいたあと、どっから出したか分からないハリセンで昴の頭を思いっきり殴った。

スッパーン!

「いっ痛っ・・・」

「お前な〜人に名前聞く前に自分からなのれ!それが常識だろうが!」

・・・少年は自分も怒る箇所がずれているのに気がついていない。

「あっ・・・すみません、えと南十字昴です。」

「昴ね〜まあ覚えておいてやるよ。同じ穴の貉だしな!〜んで俺の名

前だっけ？耳の穴かっぽじってよく聞けよ。俺の名は―」

夜の広場に風が吹く。木の葉を巻き上げ空へと舞い上がっていく。それに呼応するように幻想的な空の星たちが輝き、二人を見下ろす。

「・・・って呑気にこんなことしてる場合じゃねえんだ！次はお前の身に起こったことについてだ。」

そう、それは少年が言ったある台詞・・・

『鬼のなりそこない』

普通、鬼たちに襲われ心を喰われればその者も鬼になる。しかし、昂は例外だった。

「お前最初声が出なかったら？鬼ってのは心がねえから声が出せないんだ。だそうと思わないからな。けどお前は鬼に半分以上心を喰われかけて声が出せなくなっても、声をだそうとした。簡単に言や鬼と人間の中途半端のライン上にお前と俺はいんだよ。これからは『負』の感情に負けて鬼になることはあっても、人間の側に戻ることはできねえ。まあ戻ってもいいけどな。だが、戻るときは覚悟を決めなきゃならねえ。―なんでって顔してんな。俺達は鬼を引き寄せる存在なんだ。ここまで言や分かんだろ？つまり、俺たちが表の世界に戻れば守りたい者たちを常に危険と隣り合わせにして過ごして行かなきゃならない」

ここまで言い少年は言葉を切った。静寂が二人を包む。昂がここまですべて聞いて分かったのはひとつだけ。けどそれを頭で理解したくはなかった。

—もう、沙梨香と一緒にはいられない—

胸が締め付けられるようだった。鬼に襲われたときは死ぬかもしれない。自分はこのに在るのに会いに行くことはできない。昴はただ泣いた。そばで笑っていた妹のあどけない表情を思い出しながら・・・。

少年は声をかけるようなことはせずただ空を見上げていた。

—月の光が注ぐ空の下。『世界』は厳しい決断を昴に強いていた。

『昴の決断、物語の始まり』

ひとしきり泣いた昴はようやく落ち着いた。瞼は腫れ上がり、鼻も赤くなっていた。それを見て少年は口を開いた。

「お前これからどうする？このままだったら鬼に喰われて死ぬかねえけど。—俺と一緒に来るか？」

昴は目を見開いて驚いた。そしてしばらく沈黙したあと、か細い声が聞こえた。

「どうして・・・そんなに気にかけてくれるんですか？」

「そりゃ、俺とお前は同じ穴の貉だからな。せつかく出来た話相手がいなくなったらつまんねえし。だからといってずっとつるむ気はねえぞ。その使い方わかりやどうしたって生きて行けるだろ」

少年は昴のブレスレットを指差しながら言った。

昴は黙っている。少年も別に急いでいるわけでもないのでまた空を

見て昴の返答を待った。

「―さんは鬼に何をしたんですか？」

昴はそこで眠っている奴等を指差しながら言った。

「俺が持つてるこれは『負』のオーラを拭いさって鬼を人間に戻すことが出来る。だからそこにいるのは人間に戻った奴等だ。当人たちに鬼なっているときの記憶はないが、なんだかしんねえが『死神に連れてかれかけた』とか言いふらし回ってんだ。まあ外に出たことも覚えてねえから外で寝てればそう思っても仕方ねえけどな。【異世界】から来たやつはこっちで保護して、『時空の歪み』があった時に送り返してっぞ。面倒くせえがな」

自分の持っている剣をなでながら心底面倒臭そうにため息をつく。

「だから俺一人でこんな作業するよりお前にも手伝わせたほうが効率がいいんだよ」

昴は少年の話を何か考えながら聞いていた。―が黙って手を差し出した。

少年は二つと口の端を吊り上げて笑いその手をとった。

―そして二人は闇の中に消えて行った……

少年と少女（3）（前書き）

更新が遅れてすいませんでした！

2話分一気に更新するので許して下さい。

それでは本文をどうぞ！

少年と少女（3）

『世界の異変、少女の決意』

朝。

蒼いこの『世界』はいつまで見ても飽きない澄んだ光を放っているように見える。だが、それは所詮見せかけでしかない。

―この『世界』に安息の日などなくなってしまったのだから…。

昴が突然失踪してしまったあの夜からはや一年。『世界』は日に日に荒れて行った。鬼たちの徘徊する量は増え、空から降り注ぐ陽光が消えると外に出る者はいなくなった。しかし、鬼たちの行動は凶暴化し家にいる人々をも襲い始めた。人々の恐怖は増したが、鬼たち相手に為すすべがなかった…。

昴の最愛の妹・沙梨香は今を生きるため必死にバイトをしていた。―いつか必ず兄さんにまた会える、会ったら兄さんがいなくなつて前より強くなった自分を誉めて抱き締めて欲しい…。何よりまたあの頃のように二人で生きて行きたい…

あの夜、いつもより帰りが遅い昴を心配して窓からずっと昴が帰つて来るのを待っていた。しかし、いつの間にか沙梨香は眠ってしまった。起きたとき沙梨香は自分のベットで寝ていた。自分でベットまで行ったこと覚えのない沙梨香は昴が帰ってきて自分をベクトまで運んでくれたのだと思った。―だが、狭い部屋のどこにも昴を見つけられず、代わりに昴の字で自分宛に書かれた手紙を見つけた。そこに書かれていた内容は―

『沙梨香へ

ごめんな。急な仕事で当分帰れそうにないんだ。戸締まりはきちんとするんだぞ。あと夜は出歩かない（・・・・）こと。―じゃあ元気でな。』

たったこれだけの短い手紙。だからこそ沙梨香はこれを読んですぐにここに（・・・・）書かれているのが嘘だと分かった。

夜の世界が危険なことは皆知っている。それなのに夜に仕事をする人々は少数だ。だからどんなに忙しい仕事であっても陽の光がなくなれば人々は家へと帰る。つまり、仕事で当分帰って来れないわけがない（・・・・）ということだ。

昴は誰よりも沙梨香を大事にしている。それは沙梨香も同様である。たった二人だけの兄妹なのだから。だからこそ沙梨香は昴の言わんとしていることが分かってしまう。

―もう昴が家に帰ることができない、と言っているのだということが。

沙梨香の瞳から涙が流れ頬を伝わって手紙へと落ちた。

―ポタッポタッ：

昴に何があったのかなんて分かる筈がない。鬼に喰われたかもしれないがそうしたら、この手紙がここにあるわけない（・・・・）。沙梨香は涙を流しながら手紙を顔に押し付け声をおしころしてただ泣いた。

ひとしきり泣いた沙梨香は涙を拭き、カーテンの隙間から差し込む陽の光を窓を開けて招き入れた。

―泣いてちゃだめ。兄さんに会うためにも生きなきゃ。

何処までも蒼く澄みわたる空を眺めていた沙梨香の目に決意の朱い

光が灯った。そこにはもう泣いている少女の姿はなかった。

『運命の分岐点』

昼。

陽が高くなり、人々の人口密度が高くなる頃、沙梨香はバイトに明け暮れていた。普通の家庭であったならば学校に行き勉強するのが学生の定めとばかりに言っているが、沙梨香にそんなお金などなく毎日を生きるのに必死だった。バイトの合間に昴を探したり、社会についても勉強しなくてはならない。今までは昴がやってくれていたので知らなくても良かったが実際に自分ひとりで生きていくには必ず必要となってくる。

「ふー：ようやく一段落つと。」

沙梨香はバイトの昼休みに空高く上がった太陽を眩しそうに見上げた。昴も沙梨香も空を見るのが好きだった。辛いことや苦しいことがあっても空を見上げると不思議にも顔がほころんでいくのだ。

「昴も今頃空でも見上げてるのかな…？」

空を介して二人はつながっている。どんなに遠く離れても、お互いを思う気持ちは変わらない。沙梨香が今を必死に生きてこれるのも兄妹の『絆』が胸にあるからだ。

余談だがこの頃から沙梨香は昴のことを兄さんではなく昴と呼ぶようになった。理由は単純明解。そのほうが楽だから。

しばらく空を見上げていたが日射しのせいで肌から滲みでた汗を拭

おうとハンカチのあるポケットに手を入れた沙梨香は違和感があるのに気がついて、違和感の正体を取り出した。

―それはルビーとサファイアの二つのロケットペンダントと黒い鞆に収まっている小さな剣のアクセサリがついたネックレスだった。剣は精巧に作られており、まるで真剣をそのまま小さくしたようだった。

「あゝさっきのお客様からもらったやつ、ポケットに入れっぱなしだった…。」

―思えば変な客だった。

そのときのことを思い出して渋面になっていた沙梨香だがすぐにまあいいか、と家で作ってきた弁当を食べ始めた。料理の腕前は沙梨香のほうが上だったが二人とも料理は好きなので片方に任せてばかりではなかった。

沙梨香が弁当を食べ終わったとき、遠くから悲痛な叫び声が聞こえてきた。

―なんだろう、今の？

不思議に思った沙梨香は急いで弁当をしまおうと声のしたほうへと走っていった。

声が出たほうに近づくたびに声が大きくなる。それもひとりじゃなく大勢の、若者の声。

やっとたどり着いたそこは狭い路地裏だった。太陽が真上にあるにもかかわらず陽の光が届かないところで、沙梨は目の前に広がるその光景に声も出ずに立ちすくんでしまう。目はある一点を凝視し、動かせない。

さっき聞こえてきた声だと思われる何十人という人たちがそこかし

ここに倒れていた。血は出ていないし殴られた形跡もないのに皆等しく白目を剥いていた。その中心に背中を丸め犬のように四つん這いになって、ひとりの青年の肩に（・・）噛みついていてる男がいた。さながら吸血鬼の映画の1シーンのようにも見える。

―それでも青年にもその犬男にも血が出ている様子は見られない。

必死に抵抗していた青年も徐々に抵抗がなくなり、宙をさまよっていた手がパタリと地面に落ちた。そして他の人たちと同様に白目を剥いて動かなくなった。

一部始終を見ていた沙梨香はただ呆然とするしかない。

―な…に…よ、これ…。何が…

ひどい目眩が襲い沙梨香は立っていられなくなり、その場に座りこんだ。自分の理解を越える出来事が今、目の前で起こっている。

沙梨香はそれでもその犬男から目を離すことができない。すると沙梨香がそこにいるのに気付いた犬男は沙梨香のほうにゆっくりと頭を回転して視線だけを沙梨香に向けた。

―その目には何も写っておらず、暗い灰色をしていた。

サーと血の気が引いて顔が青ざめたのが分かる。

―逃げなくちゃ…

恐怖から身体が震えだし、ズリズリと後ろへ逃げようと手を動かそうとするがさっき出したポケットの中身を握りしめていて上手く動かせない。

沙梨香の様子をしばらく見ていた犬男は狂ったように顔を歪めニィ

ッ、と笑った。沙梨香の頭に犬男の心の声が響く。

―新しい……獲物……だ……

悪寒と恐怖が入り混じり、身体に力が入らない。声をだそうとしても出すことができない。犬男が自分のほうに体を向け、ゆっくりと近づいてくる。どうすることもできない沙梨香は目を閉じ、心の中で必死に叫ぶ。

―たす……けて、助けて、兄さんー！

その途端、握りしめていた手が光り出した。犬男はその光に耐えられず後退し、物陰に身を隠した。

沙梨香は何が起こったか分からず光る原因を手を開いて見る。先ほど客からもらった剣のアクセサリーが紅く輝き、手から離れて宙に浮いた（……）。すると剣は一層輝きを放ちアクセサリーから本物の真剣へと変わった。フワリと自分の目の前にくる紅い光を放つ真剣を沙梨香は呆然として見ていた。

だが、その間に沙梨香の周りでは異変が起きていた。そこかしこに倒れていた人たちが徐々に起き出し、虚ろな目を沙梨香に向ける。

―人々の目は犬男と同様に暗い灰色をしていた。

異変に気がついた沙梨香は咄嗟に剣を握りそれを支えに立ち上がった。

―なに……なんなのよ！さっきから一体！

沙梨香は今まで握ったこともない剣を自分の前で持ち、目の前の『

異形』らと対峙する。足は振るえ、腰も退けているのにそれでも立っている。

沙梨香もバカでない。ただあまりに目まぐるしくいろいろなことが起こって思考が停止していたのだ。けれど、剣を持った瞬間頭の中が一気に整理され、自分の状況を冷静に見ることが出来た。

—こいつらは『鬼』だ：！

昼間ということで失念していたがここは陽の光が届かないのでまるで夜の世界にいると錯覚するほど暗い。つまり、鬼が活動するには最適な場所なのだ。

しかし、今の自分の状況が分かってもそれを打破するすが分らない。沙梨香が考えこんでいる間にも鬼たちは起き上がり迫ってくる。その恐怖に心を縛られ、動くことができない。いや、心が恐怖にわしずかみされているのだ。振るえの止まらない足を動かそうと懸命に自分を叱りつけるが味わった恐怖はそうそう簡単に抜けるものではない。

—お願いだから動いて……！

沙梨香が心の中でまた悲鳴のような声を上げると剣が凄まじい光を放ち始める。

—暗い路地裏に放たれる紅い光は、はたから見ると紅黒くまるで鬼たちの心を表しているようにも見えた。

光が収束すると周りの鬼たちはバタバタと倒れていった。ひとり残らず倒れた瞬間、沙梨香はようやく陽の光のある場所へと走っていくことが出来た。

狭い路地裏から出て陽の光を浴びたとき剣は瞬時にもとのアクセサリに戻った。助かったとはいえ、それでも沙梨香の恐怖は心に根強く残ってしまった。

―兄さん、兄さん、兄さん！

陽の光が降り注ぐ中、沙梨香はその場にへたりこみ声を上げて泣き出した。

周りに誰もいなかったのが幸いして沙梨香は泣き続けた。ひとしきり泣いた後、沙梨香はフラフラと立ち上がりバイト先へと戻っていた。

陽の光がある内にバイトを早退して、アパートへと帰る中沙梨香は先ほどの鬼たちのことを考えていた。

―どうして、あんなものがいるの？怖かった…あんなのは人間なんかじゃない！…いらない…この世界にあんなやつらはいらない！兄さんも鬼に何かされたんだ！人々を…兄さんを…あいつらはっ…！！

沙梨香の心に残った恐怖は少しずつ憎悪に変わっていった。ポケットから出した剣のアクセサリがついたネックレスと二つのロケットペンダントを首からかけた。

アパートに着く頃には沙梨香の目に狂気の朱い光が灯っていた…。

少年と少女（4）完（前書き）

後書きに重要なお知らせがあります。

では本文をお楽しみ下さい！

少年と少女（4）完

『昴と沙梨香』

夜。

長い時がたち二人は再会した。昔二人でよく遊んでいた広場で。けれど、昔の仲の良い兄妹の姿はそこにはなかった……。

お互いがお互いに別々の時間を歩んできた。

昴は鬼たちを憎悪の連鎖から解放するために闇に身をかくし、表の世界に極力姿を現さないようにしていた。

自分は鬼を引き寄せる存在になってしまった。それでたくさんものを失った。

けれど、鬼を恨む気持ちにだけはなれなかった。鬼と対峙するとき聞こえてくる、悲しく、哀しい、無念の声。鬼になっても変わらないう誰かを大切に思う心。泣いたり怒ったり笑ったりして過ごしていた、退屈で幸せな毎日の記憶。

それらに触れてくうちに昴の中で何が変わっていった。

この『世界』の真実を知り、妹と一緒さりかにいられなくなったときはただ悲しくて、寂しくて、それだけしかなかった。鬼を憎むことは簡単だった……。はずなのに、むなしさだけが募っていった。

けれど、それは鬼たちも一緒なんだと気づいた。どんなに人の『心の輝き』を求めてもそれは自分のものではない。気付いたのがいつの頃かは分からない。でも誰にだって家族や友人、恋人はいる。そんな日常がいきなり壊れてしまったらきっと自分を保ってなんかいられない。だから憎悪が生まれてしまう。その時を取り戻そうとして。そうしてただむなしさだけが募っていくのだ。

昴は本当の意味での鬼の生まれた理由を知った。多分あの時、鬼に襲われず、何事もなく家に帰れていれば知らなかったこと。なら知ってしまった今、自分はどうしたいのか？もうあの日常を取り戻すことは出来ない。当たり前だ。ならするべきことはひとつ。

―だって知ってしまったから。自分に必要なものが。心が叫ぶほどに欲しいものを。

だから昴はここに来た。自分の欲しいものを今度こそ手放さずに手にいれるために―

目の前にいる愛しい妹…沙梨香を見つめ昴は口を開いた。

「沙梨香、ただいま。」

沙梨香は俯いていた。手を握りしめ、齒を食いしばり泣かないように。それなのに昴の言葉を聞いてどうしようもない気持ちになった。今の沙梨香を支えているのは鬼を憎む意地だけ。

鬼に襲われかけたあの日から沙梨香は心を捨ててきた。鬼を憎み、世界を恨んだ。それこそ鬼になってしまいかもしれないくらいに。だが、沙梨香は鬼にはならなかった。恐怖で心を縛られて、それを全て憎悪に変えても。

沙梨香も心の奥底で本当は分かっていたのだ。鬼を憎んでも、世界を恨んでも何も変わらないことを。それでも何かに執着して、しがみついていなければ生きていけなかった。だから認められなかった。自分の中に芽生えてしまった『思い』を。

二人の間に静かな空気が流れる。昴は何も言わず俯いている沙梨香を見つめていた。その昴の目には決意の碧い光が宿っていた。

昴としてはいろいろと聞きたいこともあったのだろう。

―なぜここにいるのか？ どうして鬼のことを知ってるのか？ 世界の真実を知っているのか？―

しかし、昴はその言葉を呑み込んだ。

―沙梨香がここにいる。それだけで十分だ。

昴はふっと口元を弛めて、手を空へ翳した。すると手首のブレスレットに光が収束し、一際大きな光を放ったとき、手のひらに巨大な鈍色の鎌が顕現した。

ガシャンッ！

沙梨香が突然響いた音に顔を上げるとそのまま目を見開いた。

「昴・・・？・・・っ！」

昴は沙梨香目掛けて巨大な鎌を降り下ろした。その瞬間圧縮された空気の塊がゴォォォとものすごい音をたてて沙梨香に迫って来た。咄嗟に飛び退いたがコートの裾の部分がバツサリと切られ、昴のいきなりの行動に沙梨香は呆然とするしかない。

―昂が私に攻撃してくるなんて・・・

混乱した沙梨香は昂から繰り出される斬撃をなんとか紙一重でかわしていた。しかし、かわすことで精一杯の沙梨香は昂の行動を読めなかった。いつの間にか目の前にまで昂が迫り鎌が降り下ろされていた。

！・・・・・・っ！・・・・・・

ガキーンッ！

沙梨香はネックレスの真剣を鎌の目の前に顕現させてすんでのところで昂の攻撃を受け止めた。

ギリギリ…！

剣と鎌がお互いに削りあうかのような音をたてている。

昂と沙梨香の力は拮抗しているように見えたが徐々に沙梨香のほうを押され始めた。沙梨香は昂の表情を読もうとしたが月の光が逆光となり、読むことができない。

―なんで！・・・・どうして、これじゃまるで・・・・！・・・・？

ドクンッ

沙梨香の心は依然として揺れていた。

―昂の行動が分からない。どうして自分に・・・・。

唇を噛んで行き場のない思いを手に込めて力一杯押し返した。押し

返された昴は沙梨香から少し飛び退いた。

肩で息をしながら沙梨香は昴を見据える。月の光を背にしている昴の姿が何かに重なって見える。その暗いシルエットはまるで――

ドクンッ！

沙梨香の心臓が一際大きく跳ねた。見間違えようのない昴の姿が鬼と重なったのだ。その瞬間、沙梨香の目に朱い狂気の光が宿った。

「……アレハ……、『オニ』ダ……！ヤツラハコロサ
ナケレバ……！コノセカイニ、イテハイケナイ、マガイモノ……
。コロセ、コロセ、コロセ……！」

沙梨香は頭に響く声に従ってそのまま昴に突っ込んでいった。その目に宿った朱い狂気の光は煌めきを放ち、一層強くなる。

ガキーンンッ！

二人はまた激突し何度も切りつけあう。切りつけては離れまた激突する。相手に決定打を打ち込めず、ただ同じことを繰り返す。

ゴオオオオッガキンッ！ドスンッ

最初に昴が沙梨香に放ったような真空波を今度は沙梨香が昴に繰り出した。その威力は昴の比ではなく、そのまま後方に吹っ飛ばされた。武器である鎌も手放されくると回って地面に突き刺さった。

沙梨香は無機質な表情をしながら昂にトドメを刺すために向かっていく。昂は起き上がるとよろよろと上半身を起こすと上着のポケットからクリスタルが落ちた。クリスタルは月の光に照らされ、隠の光を放つ。

その光は今まで昂の顔の表情を隠していた月の光を吹き飛ばし白い光を辺りに撒き散らした。

沙梨香はその白い光によって今日初めて兄の顔を見た。俯いたり、月の光に邪魔をされ中々見れなかった兄の顔を。散々探してようやく見つけた大切な自分の肉親の懐かしい表情を。

昂は笑っていた。嬉しくて仕方ないような表情で。貧しくても楽しく、平和だったあの頃のままの笑顔で。

―なんで、私、昂に・・・何を、してるの・・・！？

その笑顔を見て沙梨香は我に返った。だが、沙梨香の思考とは裏腹に頭に先ほどの声が頭の中に響く。

―・・・コロセ、コロセ、コロセ！アレハ、オニダ！コロサナケレバナラナイ！

有無を言わさないその声に、沙梨香は懸命に頭を振って、今にも昂に降り下ろそうとしている腕を全神経を集中させ止めた。しかし、また声が響く。

―ナニヲ・・・シテイル！ハヤク・・・ヤツラヲ、コロセツ！

沙梨香は涙を流しながら懸命に頭を振る。

「・・・嫌だ、嫌だ、嫌だー！・・・昂は、たったひとりの、私の

家族・・・だから！だから・・・！」

沙梨香は泣きじゃくりながら頭に響く声に否を唱える。

「ナニヲ・・・イッテイルノダ・・・！？ソコニイルノハ、ヒトデハナイ！オニダ、オニダ、オニダ！！コロセ、コロセ、コロセ！！」

「違う！！昂は鬼なんかじゃない！！・・・鬼なんか・・・じゃない！！」

沙梨香は必死に声に向かって抗議する。鬼に襲われかけたあの日から鬼に会うたび、この声が頭に響いてきた。逆らうことも出来ず声に導かれるまま、生きてきた。

「けれど、本当は・・・！本当は・・・！」

「わ・・・たしは、こんなこと・・・したくない！もう、いやなの！鬼たちを倒すのも心を見るのも！私は・・・私は・・・ただっ！」

沙梨香は震える身体に鞭を打って声を振り絞って叫んだ。

「私は！兄さんすばるに、会いたかっただけなのー！」

鬼と向き合うたび聞こえてくる心の叫び。

「会いたい、娘に会わせて・・・！」

「誰か、俺を止めてくれ・・・！」

「お願い、私をここから出して！」

その声を聞けば聞くほど、沙梨香の胸は締め付けられた。自分ではどうすることもできない。でも心は渴きを覚えて誰かを襲う。そして――。

いつしか沙梨香が願うようになったことは昴に会うことだった。自分では止められない暴走に救いを求めて…。

ガシャンッ

沙梨香の手から剣が滑り落ち、地面に突き刺さった。そして沙梨香自身も嗚咽を漏らしながら崩れ落ちた。胸にしまってきた『思い』を吐き出して、ただ泣いていた。どうして泣いているのかも分からずに。

顔をうつむかせ泣いていた沙梨香はふと暖かいぬくもりの中にいることに気付いた。顔を上げれば昴の顔が目に入った。その顔は涙にぬれてぐしゃぐしゃになっているのに――笑っていた。沙梨香が言葉もなく呆然と昴を見上げていると昴が口を開いた。

「ごめんな。沙梨香、ひとりにして寂しい思いをさせて。」

昴の言葉に情けない泣き顔をより一層深くした沙梨香は頭を横に振って涙声で言う。

「寂しかった、けど、昴だって、同じだった、んでしょ？」

「・・・うん、寂しかった。でも、これからはずっと一緒にいよう。もう沙梨香をひとりにはしないから」

昴の言葉に沙梨香は目を見開いて驚いた。固まってしまった沙梨香

の頭を優しく微笑みながら撫でる。沙梨香は昴の胸に身体を預けて昴の言葉を待った。

「・・・沙梨香も鬼に会って知っただろう？この世界のこと。―俺も沙梨香も半分は鬼になっちまってるらしいんだ。だから声が聞こえてくるんだと思う」

昴の言葉にひどく驚いた表情を見せた沙梨香に大丈夫だよ、と優しく声をかけて続ける。

「『鬼』って言うのは本当はちよつと違うんだと思う。この世界に生きている人たちが忘れてしまった、何かを切実に求める心を吐き出しているのが・・・多分『彼ら』なんだ。人々はその心を忘れちゃったから聞こえてこなくて、恐れてしまうんだ。・・・俺にはその声が聞こえてきたんだ、『彼ら』の境遇に近い立場になったから。もちろん、その時は沙梨香と同じように『彼ら』を恨んだよ。でも『彼ら』が全部悪いんじゃないんだ。・・・沙梨香も分かっただろう？」

沙梨香は黙ったまま頭を縦に揺らした。

「俺も分かった。だから迎えに来たんだ。本音を心の底に隠してきただけど、それじゃ俺も『彼ら』と同じになっちゃうからさ。・・・俺と一緒にいこう、沙梨香。もうひとりじゃないから」

「・・・でも、私、いっぱい人、殺してきたよ・・・？そんな妹、でもいいの？」

黙っていた沙梨香が涙目になりながら聞いてきた。そんな沙梨香を昴は目を丸くしながら見つめた後、ゆっくりと言った。

「沙梨香は誰も殺してなんかいないよ。それは人を殺す道具じゃないからね。っていうか人を切れないんだよ。それ」

・・・・・・・・間・・・・・・・・

目をぱちくりさせている沙梨香に昴は自分の鎌に手を伸ばし足に向かって降り下ろした。沙梨香は驚いて目を閉じたが昴に促されて恐る恐る目を開けると何処にも血の跡がなかった。それどころか鎌は昴の足をすり抜けてしまい身体にかすり傷もつかなかった。

「どうして・・・・・・・・？」

「えーと邪気とかそういうものに反応してそれを取り除くんだって。だから沙梨香は誰も殺してない。むしろ『彼ら』を助けてたんだよ」
気がつかなかった？という笑顔で本当に嬉しそうにいう昴に沙梨香は戸惑いながら聞いた。

「・・・・・・・・昴、なんでそんなに笑顔なの？」

「ん？あー離れてても俺たち同じことしてるんだって思って」

「・・・・・・・・もしかして、さっきもそんなこと思ってたの！」

「へっ？さっきって？」

「私が昴に向かって剣を降り下ろそうとしたとき！昴笑ってたでしょ！ー！」

むーと頬を膨らませて詰め寄る沙梨香に昴はのほほんとしている。

「あーあれ？ いや、沙梨香大きくなったなーって思って・・・沙梨香？」

なぜかものすごく嫌なオーラが沙梨香から出ている気がして昴は冷や汗をかきはじめた。

―あつあれ？ なんかやばいこと言ったっけ？

あたふたしている昴の様子に沙梨香はため息をついた。

―人が一生懸命葛藤してたのに！ ぜんっぜん変わってない！ しかも、妹に斬りかかってくるし、もう何がなんだかわかんないよ！

あまりにも昔と変わらない昴を沙梨香は恨みがましくジト目で見ていると困ったようにオロオロし始まった。その様子に沙梨香は面白そうに声をたてて笑った。昴も沙梨香につられて笑った。ひとしきり笑って沙梨香は昴の目を見て言った。

「兄さん、お帰きなさい。」

『終わらない物語』

朝。

太陽が昇り世界を照らす。月の光によって放たれていた隠の光も消え失せ、陽の光が降り注ぐ。

ある広場ではさまざまな人たちが眠っていたが陽の光を浴びて次第に起き出した。自分がなぜこんなところで眠っているのか分からない顔をしていたが、ある一角を見て、そこにいたほぼ全員が微笑んだ。

広場の中央には仲のよさそうな二人の兄妹が手をつないで眠っていた。

二人の寝顔は幸せそうで実際にこの光景を見た人はきつとこう思うだろう。

――願わくば……この兄妹に幸多からんことを……

少年と少女（4）完（後書き）

ここまで読んでくださった皆様に心から感謝致します。

さて、本当はこれが短編で次からきちんと「願わくば…」の本編を書こうとしたのですが、分かりずらいのでこれはこれでひとつの作品として置こうかなと思ったので本編は新たなタイトルで連載にしたいと思います。
あしからず。

ちなみにこれからは番外編で昴と沙梨香の昔のエピソードとかあの後二人はどうしたのかとかあの少年は…！とかなんとかそういうのを書こうと思います。

なのでまだしばらく続きます！もうしばらくお付き合いお願いします。
す。

ではでは次回またお会いしましょう！

当てにならない次回予告…

貧しくて暮らしていた沙梨香と昴。その頃の日常を追います。

（注意！この次回予告は当てになりません。）

二人の日々(1) (前書き)

更新が滞っております。あしからず。

二人の日々（1）

朝。

太陽が昇り、世界に光が満ちていく。それに呼応するように空の蒼も澄み渡っていく。

そんな世界のある少年と少女のお話。『鬼』が現れる前の貧しくも平和で幸せな時間。

—はてさて、物語が始まります—

「沙梨香くもう起きる時間だぞー」

あるアパートの一室に元気の良い声が響く。その後からコトコトと何かを煮込む音が聞こえ、そこにリズム感あふれる包丁の音が加わり可愛らしい響きとなっていた。

南十字昂は朝が苦手な妹のために朝食を作っていた。彼らに両親はいなく、つい最近まで孤児院にいた。しかし、その孤児院も2ヶ月ほど前に閉鎖されてしまったので、二人は毎日バイトづけの日々を送っていた。

この世界で言うバイトとは主に雑用となり、具体的に何をするかというとクリスタルの加工をクリスタル同士を擦り合わせて指定の形にしていくもので、コツさえ使えば短時間に小ささまざまな形のクリスタルが出来ていく。

電気がまったくいってないこの世界にはクリスタルなどの宝石類は大切な道具であり、資源であった。そのため、クリスタルに関わる雑用は腐るほどあるのだ。

二人は孤児院から出たあとクリスタル鉱山の従業員にここで働かないかと誘われ朝昼晩と働いていた。その従業員も実は孤児院を出た身だったらしく、他の孤児院にいた人たちにも何かと世話を焼いていた。

この鉱山はこの街唯一の鉱山であつたり、給料もそれなりで、従業員用アパートまで貸しているので二人にとってまさに天からの恵みとも思えた。

「うーん…起きられないよう兄さん…」

布団の中からくぐもった声が聞こえてきた昴は料理の手を休め沙梨香を起こしに行った。

「沙ー梨香、起きなきゃ駄目だろう？兄ちゃん特製の目玉焼きが食えなくもいいのか？」

沙梨香を起こす時の口癖で必ず食べ物で釣る。そして朝ご飯の匂いを嗅がせれば一発で起き上がるのだが…

「兄ちゃん特製ってえー…ただソースかけるだけじゃないのお…はくちゅっ…私は醤油派なんだからー…ソースはいらない…のおー…」

しっかりしてそうで以外に天然ボケな兄の言葉にツツコミを入れつつ少し苦しそうな声で答える。しかし、沙梨香も同じ血を受け継いでいるので結局二人とも天然ボケである。そのため自分のツツコミが少々ずれているのに気がつかない。

昴が沙梨香を覗き込むと顔を真っ赤にしながらうんうんうなっていた。

…どうやら風邪を引いたらしい。

「あゝまた熱出てきたみたいだな。今日は仕事休んでゆっくりしときな」

沙梨香の額に手を当てて大体の熱さを感じとると、えゝと薬まだあったかな？と言つてがさごそと棚をいじる。ちなみにこの世界にタイオンケイ（体温計）というものは存在しない。機械そのものがないから当然とも言えるが。沙梨香は元々体が弱く孤児院にいた頃もしょっちゅう熱を出して倒れていた。そのため昴は面倒見の良いおおらかな？人柄になった。

それも昔の話で孤児院を出てから二人で働くようになってから沙梨香の体も丈夫になり、あまり熱を出さなかったが、

（…最近きつかったし、沙梨香ろくにご飯食ってなかったもんな）
いくら忙しかったといつても面倒見の良い昴はそれに気づかなかった自分を少々叱責し、沙梨香のところに残り少ない薬を持っていた。

「沙梨香、起きれるか？まずは何か食ってからじゃないと治んないぞ」

「…うゝん…起きる…」

赤い顔をしてのそのそと起き出し、席に座っていると昴が朝食を手で沙梨香のそばに来た。

「今日は家でゆっくり寝てるんだよ、沙梨香」

そう言うと沙梨香の前にご飯を置いて向かい側に腰を落とす。

二人の日々(2) (前書き)

長らくお待たせいたしました！
本編をどうぞ。

二人の日々(2)

朝ご飯を食べ終わり、昴は仕事場へと向かった。沙梨香のことは気にかかるが自分まで休んでは生活費がひどく苦しくなってしまう。

(今日は早めに上がらせてもらって、薬とあと…)

ブツブツと独り言を言いながら猛スピードで作業をこなす昴の姿に何かあったと気軽に聞けない空気が漂っていたため、他の作業員は誰も昴に話しかけない。

「おい、昴…っってお前っ！んな無表情で仕事してんじゃねー！」
その空気をまったく無視したすっとぼけた口調にその場にいた誰もが、ずっこけた。

当の本人は大して気にした風もなく、

「ん？なんだなんだ皆してこけやがって、運動不足にもほどがあんぜ」

と言って(白い目で見られているにもかかわらず)ガハハと笑っている。

昴は一旦作業を止めて笑っている人物のほうへと振り返った。だが、昴の目は笑ってない。

「…剛さん、仕事の邪魔ですが」

周りの白い目よりも冷たい目でまだガハハと笑っているオメデタな人物に声をかける。

「なんだなんだ…沙梨香が寝込んだのは俺のせいじゃないぜ？」

参った参ったとでも言うように大袈裟に肩を竦めながら剛と呼ばれた男は昂に言った。

おかもとう

本名・岡本剛。このクリスタル工場の責任者である。余談だが、鉱山の近くにはクリスタルを加工する工場が設置してある。

昂と沙梨香は孤児院を出て路頭に迷っているとき、剛に声をかけられ仕事を提供してもらったのだ。剛には感謝してもしきれない恩があるが、昂…というか沙梨香をえらく気に入っていて『あと2、3年成長したら俺のところに嫁にこい！』とまで言っている。

昂としては可愛い妹を手放したくない気持ちがあるのであまり相手にしたくはないが、なんと沙梨香はけっこう乗り気で剛と『未来の旦那さん☆』と言って親しくやっている。

確かに年もそんなに離れていないし、顔も普通より上で性格も（空気をさえ読めれば）普通だし、仕事も出来る。が、しかし、超がつくほどのシスコンで世話焼きの昂には『はい、どーぞ』とそう簡単に沙梨香を（さっきも言ったが）手放す気にはなれない。

そのため剛と話すときはいささか警戒しながらとなってしまう。

剛はそんなくそ真面目な昂をからかうのが日課で今日もからかっている。だが、昂はすこぶる機嫌が悪い。

「剛さんもしゃべってないで早く仕事終わらせたほうがいいんじゃないですか？」

「あーそうだな」

冷たく言って作業を再開する昂に軽く返したあとニヤリとした顔で、

「俺の未来の奥さん…沙梨香のことが心配だから早く仕事終わらせよ」

といい放つとそのまますたこら逃げ去ってしまった。
当然その楽しそうな姿を昂が憤怒の形相で見ていたのは言うまでもない。

同時刻…アパートにいる沙梨香は赤い顔をしてベットの中にいた。
「……ひくまくだーよー」

久々に熱が出たとはいえ昔からしょっちゅう寝込んでいたのでどうすれば早く具合が良くなるかは知っている。というより黙って寝ているしかないのだが。

朝は昂が作ってくれたおじやを食べてきちんと薬も飲んだ。それで少しは熱も引いたがやっぱり体はだるい。

（こんなとき私は兄さんに頼ってばかり…）まだ熱のある頭でぼんやりと考える。昔よりは体も幾分か丈夫になったがまだまだ自分は兄さんに甘えている。

そう遠くない将来、離ればなれになるときが来たら―私は独りぼっちでやって行けるのかな…。

うとうとしながらそんなことを考えながら沙梨香は深い眠りに落ちていった。

二人の日々(3)

剛が自分の仕事を終わらせ昴のところにやってくると、昴は剛の姿を目にした途端全くの無表情になる。

そんなわかりやすい反応に苦笑しながら近づいて

「よー昴！仕事は終わったか？」

肩を叩き声をかける。無表情ではあるが無視はしないのが昴の真面目な性格を表している。

「…たった今終わりました」

「そーか、んじゃこれ持って早く沙梨香んとこ帰ってやれ」

そう言いながら剛は昴に紙袋を手渡した。昴がちょっと驚いた表情をして受け取ったのを見ると軽くウインクをして背を向けて歩いていってしまった。

昴が紙袋の中を覗くと風邪薬や果物が入っていた。昴のことをからかってばかりいるが剛にとっては可愛い弟のようなものなのでその弟の妹なら尚更可可愛い。

ちなみに彼女有り。それを知らないのは昴だけ。（沙梨香も知って剛に悪乗りしている）かなりずれて…いや、天然…天然なんだ！

中身を見た昴はすぐに剛の後を追ひ、

「剛さん！ありがとうございます！」

と叫んだ。昴の感謝の言葉に振り返らず手だけ振って返す。一部始

終を見ていた他の作業員はその後ろ姿を見て普段一度だっと思わな
い言葉を連想する。
が、次の瞬間

「…でも果物だけじゃ沙梨香は釣れませんからね!」

…昴の勝ち誇ったような叫びに全員がずっこけたのは言うまでもな
い。

やっぱりどつかずれて…いや、天然なんだ!

同時刻…アパートでは…

うゝん…うゝん…うゝん……………

中々下がらない微熱に頭も痛い。いくら熱に慣れていても体はやっ
ぱりだるい。沙梨香は唸りながらベットに横になっていた。

昴に迷惑をかけたくないと思う一方で早く帰ってきて欲しいと思っ
てしまう自分に、

「……私、まだ兄さんに甘えてる…」

つい独り言のように呟いてそれに気づいてため息をつく。甘えてば
かりはいられないのに…昴を頼ってしまう自分に嫌気がさしていた。

タン、タン、タン、タン、

扉の向こう側から聞き慣れた足音が聞こえてくる。

ガチャ、ガチャ

扉の開く音が聞こえ沙梨香が扉のほうを向くと見慣れた顔が見える。

「……兄さん、早かったね。」

沙梨香が声をかけると昴は沙梨香のほうに視線を向けて笑顔を作った。沙梨香以外にめったに見せない無防備な笑顔。沙梨香もそれを知っているから昴には甘えてしまう。

「ただいま、沙梨香。ちゃんと寝てたか？薬飲んだか？ご飯食べたか？食べないと元気にならないぞ。それから新しい薬剛さんにももらったからそれなくなったら飲めよ。後、果物もあるぞ」

世話好きの昴は帰るなりてきばきとあちこちを掃除しながら沙梨香に話しかける。シスコンだからちよつと口うるさいのは仕方ない。それでも心配してくれているのが少し嬉しいので口には出さない。

「剛さんがくれたの？……うー果物か……」

そう言って眉をひそめる。果物自体が嫌いではないが、

「……どうせなら肉がいい……」

布団の中でボソツと言。昴しか知らない沙梨香のダークな一面に気づいているのは剛一人。

実は内面かなり男勝りな沙梨香なのであった。

その後夜ご飯を食べて早めに就寝した。昴は沙梨香が眠りにつくまで他愛のない話をしたり、仕事の話をしたりした。

次の日…

「沙梨香く？早く出ないと遅刻するぞ？」

「わわっ！待ってよう兄さん！」

元気よく部屋を後にする兄妹の姿があった。辛いときも苦しいときも二人一緒にいられたから頑張れた。

そしてこれからも――

二人の日々(3) (後書き)

次は昴が会った謎の少年の正体でも…！

ホント謎だよね！

何なんだろうね

(作者も知らない！)

未来への道筋(1)

『戦いの果てに』

朝。

昴と沙梨香が離れられになってから再会した2日後。

あの日広場で眠っていた二人を同じく広場で眠っていた―鬼になっ
てしまった人たち―によって病院へと運ばれた。

この世界で言う病院とは薬草を取扱うため薬剤師達によって成り立
っている。二人は外傷が見当たらないので病室で寝かされていた。

昴も沙梨香も中々目が覚めずしかももう離れないと言わんばかりに
互いの手をしっかりと握っていた。

他の人たちも診察を受けて早々に帰るべき場所へ帰って行った。

そして2日後。

治療師が二人の病室を訪れると部屋はもぬけの殻になっていた。ベ
ットメイキングもしてあり、シーツの上には一枚の紙が置いてあっ
た。

それには、

《介抱していただきありがとうございました。挨拶もなく失礼かと思
いますが諸事情によりこれにて挨拶と代えさせていただきます。
お世話になりました》

と流麗な文字で書かれていた。
―しかし、その日を境にこの街で二人を見かけることは二度となかった。

『不可解な謎』

昼。

太陽が空高く上り世界に光を注ぐ頃、二人はアパートの一室にいた。そこはかつて二人で生活していたアパートではなく昴が沙梨香の様子を遠くから見るためだけに借りた部屋だった。離れてからというもの昴は沙梨香が心配でたまらなかったのだ。らしいといえば昴らしいシスコンぶりである。

「……兄さんこんなとこに住んでたの？」

最初に目を覚ましたのは昴だった。そしてすぐに沙梨香も目を覚ました。二人で話あった結果、悟られないように病院を脱け出すことにしたのだ。自分達が目を覚ましたと分かれば質問責めになるのは目に見えている。

きちんとベットメイキングまでしたのは昴で誰もこないように見張っていたのは沙梨香。それから昴のアパートにやってきて部屋を見た沙梨香のため息ともつかない呟きを聞いた昴は苦笑いしながら答えた。

「うーん…男一人で住んでるからなんとも…」

「いや、そういうことじゃなくて！こんなに近くに住んでたの！？
ってこと！！」

昂の天然ボケな答えに沙梨香が少し怒った風にツツコムと昂はああ、と合点が言ったように手を叩く。

「ずっと住んでたわけじゃなくて…たまに来て鬼の気配を探してたんだよ」

「…気配？そーいや兄さん、そのブレスレットってどうしたの？そんなの持ってなかったよね？」

「それなら沙梨香もそんなネックレス持ってなかったじゃないか」

「へっ？ああこれ？バイト中にお客さんからもらったんだよ。なんか変な人だったけど」

沙梨香の言葉に昂は何やら眉間に指を当てて難しい顔をした。

そんな昂に沙梨香は頭にクエスチョンマークをつけたまま質問を繰り返した。

「兄さん？兄さんはそれどうしたの？」

「ん？あー…なんといえれば良いか…」

齒切れの悪い昂に沙梨香のクエスチョンマークは大きくなるばかり。しかし、突然

「…なあー沙梨香、そのネックレスくれたお客の顔って覚えてるか？」

「？覚えてるけど…どうしたの兄さん、究極の選択迫られてる人み

たいに眉間にしわ寄せて」

「……………夜になったら教えるよ……………多分…」

「?」

昴は沙梨香のほうを見ずに虚空を見つめたままブツブツと呟いている。その目は血走り、背中から暗いオーラがにじみ出ている。

そんな兄の様子にため息をついて沙梨香は外に出かけた。今の昴に何を言っても無駄だろう。蒼く澄みわたる空を見上げ思うことはひとつ。やはり兄妹だからか、昴が何も言わなくても沙梨香はなんとなく感じていた。そう私たちはもうすぐ――

――またこの町を去らなければならない

部屋の一步外に出ると視界が一変する。まだお昼をちょっと過ぎた頃なので太陽は空高く上って世界に陽の光を注いでいる。

自分の生まれ育った町にも。

そして他の町や本当に世界中に。

もしかしたらもっともっと遠く離れた場所にまで届いているのかもしれない。

あの日、自分が『鬼』に遭遇してしまった日。その時はただ絶望を感じた。それと同時に居場所もなくなった。

昴がいなくなっても剛さん達に励まされたりしながら生きてきたのに私はあの日恩を仇で返した。朱い狂気の光を湛えた目の私を引き止めようと伸ばされた手を振り切って。

「…皆、怒ってるかな？それとももう私たちのことなんか忘れちゃったかな…」

それだけ眩いて沙梨香はふっと自嘲気味に笑った。

未来への道筋(2)

『兄妹とある少年』

夜。

太陽が姿を隠し、陽の光が空から消え、月の光に変わっていった。蒼い空も黒く塗りつぶされ、町から音がなくなった。

あるアパートから二人の兄妹が出てくる。夜の月の光の下、いるのは二人だけだと思われるほどの静寂が広がっていた一が、それは一瞬で崩壊する。

「…兄さん…これは…」

「ああ…どうやら鬼さん達のお出ましみたいだな」

二人の兄妹の視線の先には足を引きずって進んでくる鬼達の姿があった。ここ数日でかなりの人数の鬼達を集めてしまったらしい。

一ならばやることはひとつ。

昴はブレスレットについている鎌型のキーホルダーを掴みその手を夜の空高く掲げた。途端、キーホルダーから白い光が放たれ、ガシャンッ

という音とともに昴の手には鈍色の鎌が顕現した。隣に立つ沙梨香に鬼に目線を合わせたまま言う。

「行くぞ」

「いつでも」

沙梨香は即答で昂に答えると同時に動き出した。ネックレスを首から外して剣型のアクセサリーの部分を手で握る。すると右手から紅い光が放たれ、真の姿へと戻る。鞘を片手で持ちながらは戦えないので放り投げ剣を両手に持ち鬼達に突進していく。

沙梨香が次々と鬼を倒して行くが一向にその数が減る様子はない。その反対側では昂も後ろから迫ってきた鬼達と交戦中だった。

離れていたはずの二人の距離も徐々に狭まり、いつのまにか背中を合わせた状態で戦わなければいけなくなってしまった。

キーン、ゼエゼエ・・・

「つく・・・」

「沙梨香っ！」

まだ本調子ではない沙梨香は剣の重さに手が耐えられず離してしまい、加えて鬼との戦いの疲労が沙梨香に膝をつかせた。昂が沙梨香の名前を叫ぶと同時に鬼たちは沙梨香に襲いかかった。

——もう、だめ・・・

沙梨香が目をつぶったそのとき、

「んだよ、なんでこんなにいっぱいいの？おい昂、話がちげえじやねえか」

上、いやすぐ隣からその声が聞こえた。不機嫌そうなそれでいてつまらなそうな少年の声の主は、言った。

「――消えろ」

沙梨香が目を開けるまえに声がたった一言そうつぶやくと突然風が吹き荒れ、沙梨香まで飛ばされそうになった。咄嗟に落ちていた剣を握って地面に突き刺して難を逃れた。

風が収まってから恐る恐る目を開けると、さっきまでいた鬼たちが一人残らず地に伏せていた。沙梨香が茫然とその光景を見ていると後ろから昴と先ほど聞いた少年のような声が聞こえた。

「さすがは師匠！お見事ですっ！？いったー！！・・・なんで叩くんですか！」

「だれが師匠だ！！お前の師匠になった覚えはねえ！」

「だからってそんな本気で叩かなくてもいいじゃないですか」

「んで、こいつはお前のなんなわけ？」

「俺のことは無視ですか・・・」

昴と話していた声が突然沙梨香の前方から聞こえてきたのでボーとしていた沙梨香は驚いて顔を上に向けた。月の光に照らされたその顔に沙梨香は見覚えがあった。思考がまともに働かなかったが、沙梨香はいつのまにか呟いていた。

「・・・ネックレスをくれた変なお客さん？」

沙梨香の言葉に少年は眉を寄せて考えるそぶりを見せた。沙梨香もようやく脳に酸素がいきわたり少年の姿を眺めた。昂よりも若干大人びた表情で、髪の色は月夜に輝く銀色。短髪な髪型で服装はどこかの民族衣装のような成りで、所々にダビデの星のマークが入っていた。頭にもダビデのマークが入った鉢巻きをしていた。あまりにも沙梨香がまじまじと少年を見ていたからなのかいきなり背を向けて頭をがしと掻いた。

―月明りで少年の表情までは見えないがその仕草は照れているようにも見えた。

未来への道筋(3)

『夜明けの風の音』

あけぼの。

鬼達との戦いもようやく終了する頃には夜の空が白んでいた。直に人々が目覚める時間となる。

「なんだと！お前に・・・沙梨香のことでとやかく言われる筋合いはない！！」

そんな中昴の怒声が空に響き渡った。

一時は昴と沙梨香が鬼と交戦中の数時間前に遡る――

真夜中に突如現れた少年は昴と面識があるらしく、沙梨香も見覚えのある人物だった。再び顔を合わせるまで対して気にはしていなかったが、彼からもらったネックレスは鬼を倒すことの出来るものだ。昴とも知り合いなのだから・・・

そこまで悶々と考えていた沙梨香の頭にクエスチョンマークがつく。

――どうして私に？

あの少年は何故私にネックレスを渡したんだろう。

沙梨香が自分の思考に沈んでいる間に昴と少年は話し続ける。

「にしても相変わらずお前、ずれてるよな」

「ずれてる・・・って言われても性格なんで」

「ほーそりゃまたいい性格してんなあ？おい？」

「師匠そういうばその服装なんですか？」

「てめえ人を無視しやがって・・・おいそこの！いつまで座ってる気だ、さっさと立て！！」

「ちょっと師匠！沙梨香に当たらないでくださいよ」

「うるせえ」

突然、座っている沙梨香の目線に合わせてきた少年にびっくりして沙梨香は後退りした。その行動が気に食わなかったのか少年はちつと舌打ちして立ち上がると遠くを見て心底嫌そうにため息をついた。

「〜って師匠！聞いて・・・」

「おい、昴とそこの」

「「・・・はい？」」

少年は沙梨香の後ろに視線を合わせたまま昴と沙梨香に問う。

「・・・お前らは俺を過労死させてえわけ？」

「「・・・へっ!？」」

「!？」

ふわり、沙梨香の体が宙に浮いた。否、少年が沙梨香の体を肩に乗つけて走っていた。まるで荷物のような扱いをされている沙梨香だが、本人は何が起こっているのかいまいちよく理解できていない。

「ちょっと！師匠！なんて持ち方してんですか！沙梨香は女の子ですよ！」

一人抱えているにも関わらず少年のスピードは増すばかり。後ろから昴も沙梨香の扱いに文句を言いつつ必死に追い上げるが少年との間にあいた差は縮まらない。

鬼たちから大分距離をとったところから少年は徐々にスピードを落とし、昴が追いつくのを待った。昴が追いつくと目線で場所を指示し、また速度を上げた。

昴たちがたどり着いたのは見覚えのある広場だった。かなり疲労がたまっていた昴が遅れて広場にたどり着くと、先についていた少年と沙梨香がなにやら話をしていた。

それはどこことなく楽しそうに昴の目に映る。

一気に不機嫌になった昴は二人の間に割り込むようにして話に乱入した。

「・・・なんの話をしてるんだ。」

「わっ！兄さん、驚かさないでよ。それになんだかものすごく機嫌が悪いし」

「大方、俺と沙梨香が仲よさそうにしてたのが気に入らねえんだろ

「？」

『沙梨香』というところをわざわざ強調して、にやにやしたまま昂に話しかける少年。あからさまにさっきよりも機嫌が悪くなった昂はジト目で少年を睨む。そんな昂に沙梨香は半ばあきれながら、

「キィナさんにお礼を言ってただけだよ。さっき鬼から助けてくれたし、ここまで私のこと担いで運んでくれたから。あとは兄さんが来るまで世間話してたんだよ。名前も知らなかったし」

「・・・・・・・・・・」

「沙梨香がそう言ってるのになんのお前は？言いてえことがあんならささつと言えよ」

少年Ⅱキィナはまだ信じられないというような目で見てくる昂に肩をすくめている。沙梨香もここまで言って昂が警戒心を解かないことに困っているようだった。

短い沈黙が場を支配した。黙っていた昂が重い口を開いた。

「・・・師匠。沙梨香になんでこれ渡したんだ」

昂が指しているのは沙梨香の真剣つきネックレスのことだ。沙梨香もはっとなりキィナのほうを見る。キィナは何も言わずただ昂を見ている。昂が言葉を紡ぐ。

「・・・師匠に妹、沙梨香の話をしたことがないわけじゃない。でも容姿については話したことはない。なのになんで沙梨香がこれを持って鬼と戦っているんだ！なあ、師匠！」

「……兄さん……」

昴は半泣き状態だった。沙梨香に会ってまず思ったこと、誰が沙梨香にこんなものを渡したのか。これさえなければ沙梨香も今ごろ剛たちに支えられながら怖い真実など知らずに生きられたのではないか。たえそのそばに自分がいなくても。

キイナはしばらく昴と沙梨香の様子をじっと見ていたが、ふうっと溜息をついた。そしておもむろに後ろを振り返って言った。

「……いつまで隠れてんだよ。ささっと出てこいよ」

ざああああああ

風がうなり昴と沙梨香の間を突風が駆け抜けていった。思わず目を瞑った昴と沙梨香が目を開けて見ると、そこには、

「ごめんごめん。なんだか取り込み中みたいだったからさー様子をみようかと」

キイナと同じくダビデの星のマークが入った服を着て、

「というのは建前で『なんだかおもしろそうなことになってるからしばらくのぞき見・いや様子を見よう!』ってめっちゃ楽しそうに見てたよ、梨乃^{りの}」

キイナと同じくらいの年齢の少年少女が、

「なっつつつつつ!! 彗^{きうし}君! よけいなこと言わないの!!」

そこにいた。

「・・・つーか来んのがおせえんだよ、お前ら。」

無数にいた鬼たちの山の前に立って、

「『《時の番人》』としての務め。ゆめゆめ忘れるなよ、キィナ」

―冷たい目でこちらを見据えていた

いた鬼たち（すでに邪気は消えているので今はただの人）が山積み
にされていた。

突然現れて謎の単語（時の番人とか）を言われても全く理解が出来
ない昴と沙梨香はただぼーと3人のやりとりを見ていた。

一否、見ているしかなかった。

「んで悪趣味な覗き見をしてる暇があったんだから仕事は全部終わ
ってんだろぅな？」

キイナが若干頬をひきつらせながら問うと梨乃と呼ばれた少女が胸
を張って、

「終わってるわけじゃない！というか誰のせいでこんなに忙し
くなってると思ってるの？十中八九キイナあんたのせいだからね！」

「俺が何したって言うんだ・・・」

「仕事放棄に行方不明、おまけに下界人であるあの兄妹についての
近況報告書未提出！あと・・・」

「梨乃、その話は後で。まずあの子達に説明しないと」

「あゝ・・・昴、沙梨香！」

いきなり頭を掻きながらさも面倒くさそうにキイナに名前を呼ばれ
昴と沙梨香は恐る恐る3人の側に近寄った。梨乃と呼ばれている少
女はまだ何かブツブツと文句を言っていたが隣にいる慧と呼ばれて
いる少年に「落ち着け」となだめられている。昴が何か言いたげに
キイナを見ると、やれやれといった様子でまた頭をかいていた。そ

して梨乃と慧から少し離れたところまで二人を連れて行っておもむろに話し始めた。

『世界の守護人…時の番人』

世界が世界と認識されるよりも遙か昔……。そこには何にもない空間が広がっていた。人はもちろん、動物、生きとし生けるものすべてが存在すらしていなかった頃のこと。生命のいない世界には時もあるはずもなく、ただ変わることなくあり続けた。

どのくらいそうしていたのか。あるいはたった一瞬だったのかもしれない。ほんとうに突然世界にひとつの物体が現れた。そこから、世界が構築されていった。その物体を人は‘神’と呼ぶ。

神によって何もない空間に最初に作られたのが『時』と『空間』。そのふたつが混ざり合いひとつのあるものが作られた。それが、『世界』。そして、世界には様々なものが生まれ始めた。海が生まれ、大地が作られ、生命が誕生した。

しかし、そうして形成された世界はひとつだけではなかった。世界は多様に姿を変えていくうちに分裂し、そこからまた新たな世界が次々と誕生していった。

世界が多くなるにつれて、神はすべての世界の存在が維持できなくなった。そこで神は考えた。ならば世界ごとに自分と同じ世界を管理できものを作ればいいと。そして、生み出されたのが時を、世界を管理する‘時の神’。その神の手足として作られたのが‘時の番人’、という人間だった。彼らの役目は時の神に仕え、世界の存在維持と時を守ること。

長い年月を経て、人間が生まれたが時の番人達と相容れることができなかった。時の番人として生まれた者たちは等しくある能力を兼ね備えていたからだ。彼らは住む場所を追われ、見かねた時の神によって地上ではない場所で生活することができた。それを、‘天界’と彼らは呼んだ。

以後彼らは世界を守るために天界で生きている。たまに地上で活動したあと天界に戻るところを下界人に目撃されて‘天使’などと呼ばれることもある。

『本当のこと』

キイナの話を聞いた二人はただ茫然としていた。そんな二人の様子にキイナは困ったように頭をかいている。だが、そのままにもしておけないと思ったのか面倒臭そうに口を開きかけたところで、

「キイナ、話は終わったの!？」

絶妙なタイミングで梨乃の叫びがキイナ達のところまで届いた。キイナは開きかけた口をまた閉じて二人に目線だけで戻るように言う。とスタコラと行ってしまった。昴と沙梨香は顔を見合わせて動けずにいたが梨乃が「こっちにおいでー」と手招きしていたのでノロノロと歩いて行った。

三人のところに着くとキイナが少し不機嫌な顔で座っていた。どうやら梨乃からお叱りを受けたらしく慧も少々苦い顔をしていた。

「全く連絡寄越さないんだから。こっちはいろいろと大変なんだからきちんと連絡寄越しなさいね!」

「…………へーい…………」

「んじゃ次はあなたたちね。昴、沙梨香」

キィナの生返事を意に介さず梨乃は二人に向き直った。梨乃はキィナの時とはうってかわって少し申し訳ない顔になって話出した。

「今まで大変だったでしょ？本当のこと中々教えられなくてごめんね」

「…………俺達のことを知ってたんですか？」

昴が梨乃に尋ねると梨乃はキィナを指差しながら、

「私たち以外に『鬼』に食われなかった子がいるっていう報告だけ（……）は受けてたから」

と若干‘だけ’を強調して言った。昴はその言葉に反応しておうむ返しのように言った。

「……『鬼』に食われなかった……？」

未来への道筋(5) (前書き)

＊更新が滞っています (0 | 0)

未来への道筋(5)

「『鬼』に食われなかった・・・ってどういうことですか？俺は師匠に・・・鬼のなりそこないだって言われて・・・それに沙梨香だって・・・！！あんたが、あんたが巻き込んだのか！？」

「兄さん！！落ち着いて！まだそうと決まったわけじゃ・・・」

昴は自分が半分鬼になり、鬼に狙われる存在になってしまったとキイナから聞いたことで沙梨香から離れなければ沙梨香まで巻き込んでしまう、と思いい涙をこらえてその場を去ったはずだったが今の梨乃の話が本当ならば話が違う。

『鬼のなりそこない』以前キイナに言われた言葉が昴の脳裏によみがえる。どうしてそう言わなければいけなかったのか。理由が聞きたくて昴はかみつくようにキイナを見た。

だが、肝心のキイナは昴の視線に面倒くさそうに言った。

「こっちにだっていろいろあんだよ。とりあえず落ち着け。今から話してやっから」

キイナの言い方が昴にはわざとはぐらかしているようにしか聞こえなかった。疑心暗鬼に陥った昴には何が正しいのか判断がつかなくなっていたのだ

「そう言っただけですか！？あの時のように俺と沙梨香を引き離すのか！！」

「兄さん！！」

沙梨香も昴を止めるので必死だった。あの優しい兄が師匠と慕っていた人に激情の念をぶつけている。それに沙梨香には昴と引き離された理由も知らなかったし、どうしてキィナが自分に鬼を救う武器を渡したのかも聞けずにいた。しかし、沙梨香が昴を止めるのもむなしくキィナが最悪の一言を放った。

「・・・過保護すぎるんじゃないの？なあ、シスコン」

その言葉に沙梨香がキィナのほうを向くと若干ふてくされたような顔をして座っていた。キィナの様子に怪訝な顔をしたのも束の間、昴が吠えるようにして叫んだ。

「なんだと！お前に・・・沙梨香のこととでとやかく言われる筋合いはない！！」

― 静寂を打ち破るような怒声が辺りに響き、月が沈み太陽が昇り始めようとしていた

『エピローグ』

朝。

白んでいた空に太陽の光が灯り、雲の間から『陽』の光が差し込み辺りを照らし始めた。

今にもキィナに飛びかかっているいきそうな昴を必死に沙梨香がなだめていると、さっきまで沈黙していた梨乃が口を開いた。

「キィナ、昴、止めな。それ以上続けるなら鉄パイプ（？）で頭かち割るよ？」

梨乃の言葉に身の危険を感じあわてて梨乃のほうに顔を向ける3人。目線の先には完全に目が据わっていてどこから持ってきたのか、右手には鉄パイプ（？）を持ちどす黒いオーラが背後を漂っていた。慧はとうとすでに遠くまで避難していた。

固まる昴と沙梨香のそばを通り抜け鉄パイプ（？）でキィナの頭を殴った。

「「!？」」

驚く二人の傍らで梨乃とキィナが場にそぐわないような軽快な口調で話し始めた。

「いい加減にしなよ、キィナ。いつまで子供染みたことしてんの？」

「うっせーな・・・何の話だよ」

梨乃が若干怒ったような口調でキィナを窘めると先ほどと同じように不貞腐れた顔と口調で梨乃の方を見ずにあさつての方を向きながらぶっきらぼうに言い放つ。そんなキィナの様子に梨乃は溜息をつきながら

話しかける。

「全くっ・・・あんたが話さないんだったら私が全部話すよ？それでいいの？」

「・・・いいんじゃないの」

「そんな納得してない顔で言われても説得力ないんだからね。ったく子供^{がき}じゃないんだから、兄貴に嫉妬してどうすんの」

「・・・嫉妬じゃねーっの」

梨乃の言葉にピクリと反応しながら小さな声で否定するがその顔はほんのり赤い。まるで姉弟のような会話に昂と沙梨香が茫然としていると慧が近くまできて説明してくれた。だが、その顔はいかにも面倒くさそうである。

「梨乃が持つてるの別に鉄パイプじゃないから」

「えっ・・・!! だってさっき・・・」

「それでも言わないと君ら止まんなかっただろ？」

慧にあっさりとそうかえされ昂はぐつと呻いて、二の句が告げないでいると慧はため息をひとつついてまた話した。

「俺達時の番人の仕事は世界を守護すること。そのために時の番人は普通の人とは違う『力』を持ってる。例えば、」

慧は鬼であった人達の山を指差して言葉を続ける。

「あんな風に心を闇に捕らわれてしまった人達を元に戻したりする」

沙梨香は慧の言葉にさっきから黙って真剣に話を聞いていた。が、頭では膨れ上がる疑問が沙梨香の中で渦巻いていた。

—どうして私と兄さんにはそんなことができるのだろうか？

慧の言うような『力』がなぜ時の番人でもない沙梨香と昂が使えるのか。キイナはどうして2人に接触したのか。沙梨香が慧に訴えかけるような視線を向けると、慧は一瞬顔をしかめた。その顔はまるで言うことをためらっているようにも見えた。

その様子に沙梨香が少し困惑していると、頭を振って決心したように口を開いた。が、

「君らのりよ———」

「あなたたちに両親がいないのはなぜだと思う？」

慧の言葉をかき消すように、いつの間にそばに駆け寄ってきたのか、梨乃が唐突に言い放った。慧はというと、「しょうがないな・・・」と言って腕を組んで溜息をついていた。

「えっ!？」

「あなたがそれを使えるのには理由があるのよ。そしてその理由こそがキイナや私たちに今まで真実を言わせてはくれなかった・・・」

梨乃の顔に影が差して短い沈黙が下りた。いきなり今まで聞いたこともなかった両親の話題が出て戸惑っていると、

「もったいぶってんなよ、いいから話せばいいだろう」

さっきまで不貞腐れたような顔して離れたところで成り行きを見ていたキイナがようやく口を挿んだ。梨乃が少し咎めるような視線を

キイナに向けるもキイナはあさつての方を見ていて梨乃と目を合わせようもしない。結局、あきらめたのか溜息にも似た息を吐くと、昴たちに向き直って話しはじめた。

「昴、沙梨香。あなたたちの母親はね・・・私たちと同じ時の番人だったの」

「・・・・」

初めて聞かされる両親の話に不安げな表情の昴と沙梨香だったが、2人は黙って聞いていた。

梨乃の話はこうだった。

母親の名前は黎^{れい}。彼女は時の番人として天界で生まれた。時の番人は時を扱う力を絶やさないために“時の掟”を神から課せられていた。

その掟の1つに、

〈下界との交流を禁ず〉

というものがあり、掟を破れば破ったものに災厄が訪れる。

時の力とは総じて“血族”に関わってくる。いわば、血のつながりが重要となるのだ。時の番人同士や天界人ならば力は後世に受け継がれるが、下界人では逆に廃れていってしまうというものだった。

「彼女はその掟破り時の番人を辞めさせられ、天界から追放された・・・そして下界人の人と結婚してあなたたち2人を産んだの」

梨乃の言葉は哀しい響きを含んでいた。唇をきつく結んで必死に泣かないようにする姿に、昴は言葉の続きに何が来るのか察し、梨乃

が言葉を発する前に言った。

「・・・俺達を産んだ後、死んだのか・・・母さんも父さんも・・・」

「・・・・・・・・・・」

梨乃は何も言えず頷いた。

昂と沙梨香も覚えていないとはいえ、両親が他界してしまっている
事実は衝撃的で言葉が出ないようだった。

しばらく沈黙が続いたが梨乃のほうから盛大なため息が聞こえ――

「黎さんが亡くなったとき、梨乃はその現場にいたんだ。だからこの話をするとその時の光景がフラッシュバックしてこうなる」

慧が俯いてしまった梨乃を自分のほうに引き寄せ頭をなでながら言
ったことで沈黙を破った。

「なのに意地張って自分から話すんだ。困った奴だよ、お前は」

一梨乃に向けられたその言葉は心配と慈愛の響きが含まれていた。

願わくば・・・(前書き)

長い間放置してすみません。

これにて完結致します。

願わくば・・・

―物語の終幕・・・

―真実を知った少年と少女はこれからどこへ向かうのか

―静まりかえった世界で今、新たな物語が始まろうとしていた

昼。

太陽が高く昇り、蒼く澄み渡った世界へ陽の光を注いでいる。

「昂―沙梨香―こっちこっち!」

澄み切った世界に凜とした響きを持った少女の声が響いた。

「兄さん! 梨乃が呼んでるよ、早く行かないと」

「沙梨香ちよつと待てって・・・」

続いて仲のよさそうな兄妹の声が聞こえてくる。その無邪気な声は蒼い空に吸い込まれていった。

ここは『天界』。時の番人たちが住まう唯一の世界。

地上から遙か彼方、空の向こうにあり、能力ちからをもっているものにし

か見ることが出来ない異空間に存在している。

昴と沙梨香は梨乃たちとの話を終えたあと、この天界へと連れて来られた。

半分とはいえ時の番人の血を引いているため、下界人（地上に住む人のこと）と同じ場所で生活するのは難しい。

何故なら時の番人のもっている能力が周りに強い影響を与えてしまうため、様々なものを惹き付けやすくしてしまう。

これは「フェロモン」と呼ばれる時の番人の特異な体質である。

キイナが昴に言った「俺たちは鬼を惹き付けやすい」というのはこの体質のせいである。

「俺たちは時の番人として幼少の頃から能力の制御訓練を受けてきているが君たちは受けていない。能力が垂れ流しの状態なんだ。ここまで説明すれば大方分かってくると思うが、君たちにも同じ制御訓練を受けてもらう」

「能力が制御できるようになれば地上でも暮らして行けるようになるから！まあ、時の番人の人手が足りないから仕事はしてもらえどね」

そんな風に慧と梨乃に交互に言われて二人は天界へとやってきたのだった。

「梨乃さん、質問があるんですけど・・・これって使ってるの私たちだけなんですか？」

梨乃に呼ばれて急いで来てみれば、「天気がいいから外でお茶しよう！！」ととびきりいい笑顔で言われ、瞬間移動で一気に外に連れ出されてのんびりお茶をしていた。

その時不意に沙梨香が「あっ」と声をあげ、自分の胸にあるキイナ

に貰った黒い鞆に収まっている小さな剣のアクセサリーがついたネックレスを差しながら言ったのだった。

梨乃やキィナも何かしらロッドのようなものは持っているが、他の時の番人は持っていない人もいる。

梨乃が「ふむ」と言いながら持っていたティーカップをおいて話し出した。

「時の番人の能力ちからっていうのは大体何かを媒介にしないと使えないもんなの。んで私たちの場合自分の精神力を媒介にして使っているから本来はロッドとか持たなくても能力が使えるから別に持たなくてもいいんだけど、それは個人の自由だから。でもあなたたちは違うの」

梨乃は両手を胸の前で若干空間を開き両手を向かい合わせにして目を瞑った。すると、合わせた手の空間が光はじめ、次第にその光が凝縮されて光が無くなったあとと丸い物体が浮かんでいた。そこで梨乃の目が開き丸い物体を手にとってテーブルの上においた。

「これはね、私の能力を物体化させたものの。んでもってあなたたちが持っているそのアクセサリーの正体はこれ。あなたたちは半分しか時の番人の血を引いてないから能力も中途半端で制御が難しいの。だから私たちの能力で補うためにそれが必要なのよ」

「そうなんですか・・・」

梨乃の言葉に沙梨香はまじまじとネックレスを見る。昂も感慨深げに自分のブレスレットを見ている。

「だからこれを持ってない時は鬼に対抗できなかったんだな。そういや最初に鬼にあった時俺の声がなかったのってなんか意味があるの」

るんですか？」

「昴がビビりだって言うことじゃないの？」

「ちょっと!!それはひどくないですか!!?」

「兄さん……」

「沙梨香!?!なんだその憐れんだ目は!!」

昼間のお茶会はにぎやかに過ぎていき、昴は慧が梨乃を呼びにくるまでいじられ続けたのであった。

「二人とも、この人に面識あるよね？」

「おう、昴に沙梨香く元気してたかー？」

梨乃が去ったお茶会のテーブルには慧と慧が連れてきた人がなんの違和感もなくそこにいた。昴も沙梨香もあまりに自然にそこにいるのであやうくいつものように声を掛けそうになってはたと気づき、言葉を失った。

「なんだか元気ないぞー二人とも。それとも俺の顔を忘れたか？」

「「ごつつつ剛さん!!!!!!?」」

「ふっ驚いたか、実は俺は……」

「剛は時の番人だったんだよ。以外にも」

「・・・なんで言っちゃったかなー慧。しかもなんだその以外ってのは」

「悪い。それ以外に表現する言葉が見つからなかった」

「おい、一応言っとくが謝ってないぞ、それ」

「・・・・・・・・」

慧と剛が親しげに会話しているが、昴と沙梨香は場の展開についていけずただ呆然としていた。

「まあ、なにはともあれ元気そうじゃねえか。昴、沙梨香」

呆然としている二人に気付いた剛は昔と何も変わらない笑顔で話しかけた。そこでようやく二人とも目を丸くして反応を見せた。

「剛さん・・・」

「・・・・・・・・ご心配おかけしてすみません」

「全くだな。生きてんなら連絡ぐらいよこせ。ど阿呆」

口調は怒ってみえるが、表情はいたっていつものと変わらない。それだけで心配していてくれたことが分かり二人は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「って言っても一応剛は時の番人だから君たちがどこで何してたか全部知ってるけどね」

「まあな。黎れいさんのお子さんに何かあったら俺は黎さんの墓前に立
てないぜ」

相変わらず、ガハハハと豪快に笑いながら昂の頭をぐしゃぐしゃと
かき乱す。だが、されるがままの昂の様子にちよつと以外そうに手
を離して顔を覗き込む。すると昂は、

「・・・剛さんは母さんと知り合いなんですか？」

と真剣な顔をして剛を見た。剛も合点がいったようで「ああ」と空
を見上げて懐かしい顔になり、昔に思いを馳せていた。のであるが、

「いや、剛、説明しなよ」

慧が突っ込むまでしばらくはその状態だった剛であった。

「黎さんは俺の恩人なんだよ。燻ってた俺の心を笑いながら吹き飛
ばしてくれた。だから俺はあの人のためだったらなんでもしようっ
て決めてたんだ」

さっきの懐かしそうな顔のまま、昂の頭を今度はぽんぽんと叩きな
がら言った。

「まっなんにしてもお前らが元気に生きてりゃ本望だろうよ」

「・・・はい！」

「剛！あ・ん・た・はく仕事をしろー！」

「げっ！」

さっきまでのいい雰囲気をぶち壊すような梨乃の怒号が響き渡り、剛はスタコラと去って行ってしまった。

そんな剛の姿を見て昴と沙梨香はお互いに笑いあった。

とある世界のとある兄妹のお話。

彼らは離れ、また出会いそしてこれからを一緒に歩んでいく。

一願わくば彼らの旅路に幸多からんことを…

願わくば・・・（後書き）

彼らの物語はまた始まっていきます。

読んでくださった方々、拙い文章でしたがお楽しみ頂けたでしょうか？

それではまた会えることを祈って…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2500i/>

願わくば…

2011年1月1日02時29分発行